

佛教大学保健医療技術学部論集 第13号（2019年3月）

原 著

小学生児童に対する花育活動の効果

— 自尊感情に着目して —

The Effect of Flower Activities for Elementary School Students.

— Changes in Self-Esteem —

白井 はる奈

Haruna SHIRAI

梶原 香里

Kaori KAJIWARA

抄 録

本研究の目的は、花育活動が児童に与える効果を明らかにすることである。花を用いた活動に関する研究は散見されるが、小学生児童への効果を検証した研究論文はない。本研究では、A小学校の3年生児童132名に対し、フラワーアレンジメントを作成する花育活動を行い、実施直前と直後に、フェイススケールと自尊感情を問うアンケートを実施した。結果、フェイススケールは活動の前後において、平均5.14から5.80に変化し、検定の結果、活動の前後の値には統計的な有意差がみられ、活動により、気持ちがよりポジティブになることがわかった。自尊感情尺度では、活動の前後で「①自分が好き」、「②自分を大切に思える」、「③自分には良いところがある」、「⑦個性を大切にしたい」の項目で、統計的な有意差が見られ、「花育活動により、自分のことをより好きになり、大切に思えるようになる」、すなわち「児童の自尊感情が高まる」ことが明らかになった。

キーワード ■ 自尊感情, 児童, 花育, フラワーアレンジメント

はじめに

X県では、花き振興ネットワークを組織し、農林水産省の国産花きイノベーション推進事業を活用して、小学校・福祉施設を対象とした「花育活動」を行っている。X県における花育活動の主な内容はフラワーアレンジメント・いけばな・園芸の体験授業であり、フラワーアレン

ジメントや生け花の専門家が講師となり、出前授業を行っている。今回、花育活動の効果を明らかにするために本研究を行った。

花育とは、花や緑に親しみ・育てる機会を通して、子どもたちにやさしさや美しさを感じる気持ちを育む活動¹⁾である。平成21年に全国花育活動推進協議会が発足し、花緑のイベント、ワークショップ、学校教育など要望に応じて協力を行っている¹⁾。具体的な活動としては、フラワーアレンジメント、寄せ植えづくり、花壇づくり、いけばな、押し花づくりなどがある。他にもさまざまな活動があるが、花や緑をただ栽培・観察するだけでなく、栽培後の活動や活用にも目を向け、児童が生活を楽しむための手法や創意工夫など興味をもって活動できる内容とされている¹⁾。本研究では、X県の花育活動で行われることの多い、フラワーアレンジメントに着目した。

フラワーアレンジメントの効果に関する研究は散見される^{2~6)}が、統合失調症患者や高齢者、身体障害者、犯罪行為のあった少年、刑期を終えた成人への介入研究であった。Mochizuki-Kawai ら²⁾は、統合失調症患者に対し、フラワーアレンジメント製作を繰り返す行うことにより、視空間的ワーキングメモリーの改善が認められることを明らかにした。瀬山ら³⁾は、犯罪行為のあった少年と刑期を終えた成人にフラワーアレンジメントなどの園芸療法を行うことにより、ストレスが緩和（唾液中コルチゾール値の減少）し、気分調査表（点数が高い方が不安感が高いと判断される、自己評価式アンケート調査）の合計点が低下し、心理面への効果があることを明らかにした。白井ら⁵⁾は、健康な中高年らがフラワーアレンジメントを行うことで、ストレスが緩和（唾液中コルチゾール値の減少）し、心理面を問う質問紙において、「気持ちがくつろぐ」「自信がもてる」「誇りに思う」などの項目で、有意に上昇することを明らかにした。柴谷⁶⁾は、身体障害者療護施設入居者（脳性麻痺のある30～50歳代女性7名）にフラワーアレンジメントを月に1回、7年間継続して行うことで、身体・知覚的能力、対人関係能力、感情コントロール能力が向上したことを明らかにした。筆者が調べた限り、小学生児童への効果を検証した研究論文はなかった。

本研究の目的は、花育活動が児童に与える効果を明らかにすることである。過去の、花育活動後の児童の感想文から、児童が花育活動を楽しみ、有能感を得ていることが推察されたため、「花育活動により児童の自尊感情が高まる」という仮説を立て、その検証を行った。

方法

1. 対象者

対象は、X県Y市内の公立小学校の一つであるA小学校の3年生児童132名（33名×4クラス）であった。

2. 倫理的配慮

本研究を行うにあたり、X県農林水産部農産課を通してY市教育委員会にアンケート用紙を提出し、研究実施、研究結果発表の承認を得た。対象のA小学校教員の同意を得た上で、児童と保護者にも書面にて説明を行い、両者の同意の得られた方のみを対象とした。

3. データ収集方法

(1) 花育活動について

A小学校の3年生児童132名（33名×4クラス）に対し、フラワーアレンジメントを作成する花育活動を、小学校内にある「ふれあいサロン」という特別教室にて行った。児童への花育活動経験の豊富な者が講師・補助スタッフとなり、午前中に約90分の活動を2クラスずつ行った。66名を7～8名ずつの9班に分け、メインの講師1名、補助スタッフ9名が1班に1名入り、活動を運営した。メインの講師は活動のリーダーとなり、教室の前で花材の紹介や制作手順の説明を行い、補助スタッフは担当した班の児童が予定時間内に、自分の力で作品を完成させられるように児童をサポートした。使用した花材例と完成作品例を図1に示した。



図1. 使用した花材と完成作品例

1) 使用した花材

全ての児童は共通して、カーネーション、丸葉ルスカス、レザーファンを使用し、さらに選択花材の中から、好きな花材を自由に3本選んだ。選択花材は、ケイトウ・ヒマワリ・リンドウ・スプレーマム・スプレーデルフィニウム・バラ・トルコキキョウ・アルストロメリア・アンスリウム・モカラ・ガーベラ・スターチスであった。

2) 使用した資材

各児童は、花器（ペットボトル）と吸水スポンジを1つずつ使用した。

3) 制作手順

制作手順は以下の通りであった。

- ①吸水スポンジをペットボトルの器にセットし、花を挿す目安となる線をつける。
- ②レザーファンを指定の長さに切り、挿す。
- ③カーネーションを指定の長さに切り、挿す。
- ④選んだ花材を切り分け、バランスを考えて自由に挿す。
- ⑤丸葉ルスカスを切り分け、空間を埋めて仕上げる。

4) 講師、補助スタッフの関わり

講師・補助スタッフ共に花や植物に精通している者で、全員女性であった。今回、活動の講師・補助スタッフを務めた10名のうち8名が、公益社団法人日本フラワーデザイナー協会の講師資格を取得しており、普段は自身でフラワーアレンジメントの教室を開き、講師をしていた。日本フラワーデザイナー協会の講師資格を取得していない2名のうち1名は公益社団法人日本家庭園芸普及協会のグリーンアドバイザーの資格を取得しており、もう1名は、元中学校教員で特別支援学校での勤務経験があり、長年フラワーアレンジメントを習っている者であった。

また、児童に関わる上で、講師・補助スタッフ全員が共通認識していることは以下の4点であった。

- ・勝手に作品を直さない（児童が挿したものを了解なく抜かない）
- ・児童の考えを否定しない（作品の意図を聞いたうえで、手直しが必要なら児童と相談する）
- ・担当している班の児童にまんべんなく目を配る
- ・作業が遅い児童や迷っている児童が時間内に仕上がるようにサポートする

(2) データ収集項目

以下のアンケートを、対象者の同意を得たうえで花育活動の前後に行った。使用した用紙は

図2に示した。

1) フェイススケール（図2）

使用したフェイススケールは、1が泣いている顔、6が口をあけて笑っている顔の6件法とした。

2) 自尊感情尺度（図2）

自尊感情尺度は、22項目ある「自尊感情測定尺度東京都版小学生1～3学年用」⁷⁾を参考に、7項目を抽出した。花育活動の前後に22項目全てに回答するには児童の負担が大きいと考え、5分以内に回答できるように考慮し、過去の花育活動の児童の感想文から、「自分が好き」という気持ち、感謝の気持ち、個性を認める気持ちに変化がみられるのではないかと考え、それらを表している7項目を抽出した。

自尊感情尺度は、4：あてはまる、3：どちらかというにあてはまる、2：どちらかというにあてはまらない、1：あてはまらない、の4件法である。

はないくアンケート

 いまのきもちに ちかいかおを えらんでください。








6
5
4
3
2
1

ねん
くみ
なまえ

 いまのきもちを おしえてください。①～⑦それぞれ1～4に○をつけてください。

	あてはまる ◎	どちらかという あてはまる ○	どちらかという あてはまらない △	あてはまらない ×
① あなたは じぶんのことが すきですか	4	3	2	1
② あなたは じぶんを たいせつに おもえますか	4	3	2	1
③ じぶんには よいところ が ありますか	4	3	2	1
④ あなたには じぶんのことを わかってくれるひとが いますか	4	3	2	1
⑤ じぶんのことを たいせつにしている まわりの ひとたちに「ありがとう」と おもいますか	4	3	2	1
⑥ あなたには できることが たくさんあると おもいますか	4	3	2	1
⑦ わたしは みんなとちがうじぶんを たいせつにしたいと おもいますか	4	3	2	1

図2. アンケート用紙（フェイススケールと自尊感情尺度）

4. データ分析方法

活動前後の値について、それぞれ Wilcoxon の符号付き順位検定を行った。統計解析には

IBM SPSS Statistics 23 を使用した。

結果

フェイススケールの有効回答数は 109 名，自尊感情尺度の有効回答数は 99 名であった。結果を表 1 に示した。

表 1. 活動前後の変化

項目	平均値（標準偏差）		P 値
	前	後	
フェイススケール（n=109）	5.14	5.80	<.001
自尊感情尺度（n=99）			
① 自分が好き	2.80 (0.90)	3.17 (0.95)	<.001
② 自分を大切に思える	3.41 (0.74)	3.55 (0.69)	0.016
③ 自分には良いところがある	3.04 (0.75)	3.31 (0.69)	0.001
④ 理解者がいる	3.54 (0.72)	3.60 (0.71)	0.354
⑤ 周囲に感謝	3.74 (0.51)	3.74 (0.53)	0.984
⑥ できることが沢山ある	3.28 (0.76)	3.34 (0.73)	0.451
⑦ 個性を大切にしたい	3.40 (0.68)	3.55 (0.70)	0.046

Wilcoxon の符号付き順位検定

1. フェイススケール

フェイススケールは活動の前後において，平均 5.14 から 5.80 に変化し，検定の結果，活動の前後の値には統計的な有意差がみられた（ $p<.001$ ）。

活動により，気持ちがよりポジティブになったといえる。

2. 自尊感情尺度

自尊感情尺度で，活動の前後で統計的な有意差がみられた項目は「②自分を大切に思える（あなたは自分を大切に思えますか）」（ $p<.05$ ），「⑦個性を大切にしたい（私はみんなとは違う自分を大切にしたいと思いますか）」（ $p<.01$ ），「③自分には良いところがある（自分には良いところがありますか）」（ $p<.01$ ），「①自分が好き（あなたは自分のことが好きですか）」（ $p<.001$ ）であった。

これらの結果より，「花育活動により，自分のことをより好きになり，大切に思えるようになる」，すなわち「児童の自尊感情が高まる」ことが明らかになった。

考察

1. 自尊感情が高まった要因について

今回行った花育活動は、①準備された数種類の生花の中から使用する花を“自分で”選び、「世界に一つだけの“自分の”素敵な作品」に主体的に仕上げられたこと、②生花の魅力と「切る」「挿す」を繰り返す構成的な作業により失敗なく見栄えの良い作品ができ、大きな成功体験を得られたこと、③一人ひとりの個性を肯定する講師の声かけがあったこと、の3点が奏功し、児童の自尊感情が高まったのではないかと考える。

先行研究において、中高年成人がフラワーアレンジメントを行うことで、「自信がもてる」($p<.001$)、「誇りに思う」($p<.001$)、という気持ちが上昇し、自分は価値があると思えるという気持ちが上昇（「自分は価値がない人間だ」($p<.001$)の項目で有意に低下）した⁵⁾という結果が得られている。これらは自尊感情の高まりと考えられ、本研究においても中高年成人と同じ結果が得られたといえる。

本研究で用いたアンケート用紙は、「自尊感情測定尺度東京都版小学生1～3学年用」⁷⁾を参考に作成した。「自尊感情測定尺度東京都版小学生1～3学年用」⁷⁾は22項目3因子からなる。3因子はA「自己評価・自己受容」、B「関係の中での自己」、C「自己主張・自己決定」であり、特に、A「自己評価・自己受容」が自尊感情の中核といえる評価的な側面をもつ⁸⁾と言われている。本研究において用いた7項目のうち4項目において、活動の前後で統計的な有意差が認められた。4項目のうち3項目（自分が好き、自分を大切に思える、自分には良いところがある）は元々、A「自己評価・自己受容」に属している項目であり、自尊感情の中核となる項目において向上が認められたといえる。

植物は、色や香り、手触りなど、ひとを脅かすことなく、五感を呼び覚まし、植物の侵襲性の少なさはひとに安心感をもたらす⁹⁾。そして、フラワーアレンジメントは、工程として主に「切る」「挿す」という二つの動作で行われ、構成的な作業であるため、未経験者であっても講師の説明通りに作業すれば、大変見栄えの良い作品に仕上がることが特性の一つである¹⁰⁾。

勉強面、運動面、図画工作では、個々の児童の能力や習い事での経験の有無で、結果に差が生まれやすい。しかしフラワーアレンジメントは、ほぼ全ての対象者（小学生児童）にとって初めての経験であることが多く、経験の有無による活動の遂行度、完成度に大きな差が生まれなかったことも、自尊感情が高まった要因として大きいと考える。

さらに、選択花材があったことで、より作品に「自分らしさ」を表現できたこと、また同じ花材であっても、花のつき方、咲き方、色合いなどは千差万別であり、「自分だけの」素敵な作品に仕上がったことで、児童の達成感、満足感が高まったとも考えられる。先行研究におけるフラワーアレンジメントによる介入では、花材を選ぶという工程は含まれていない。本研究においては、各々の児童が好きな色、形の花を選ぶことで自分らしさが表現しやすくなり、

「みんなとは違う自分を大切にしたい」という気持ちが向上したと考えられる。本項目は小学生の自尊感情を構成する3因子のC「自己主張・自己決定」に属している項目である。

また、講師と補助スタッフともに小学校での花育活動経験が豊富であり、上述した共通認識に基づいて一人ひとりに目を配り、全員が成功体験を得ることを目標に行っており、講師の言動が児童の活動を肯定し、安心感のある雰囲気の中で活動を行えたことも自尊感情が高まった要因として大きい。柴谷⁶⁾も、身体障害者療護施設の入居者がフラワーアレンジメントを行うことで、様々な機能が向上したが、活動に関わるボランティアや職員などによるゆとりある援助が結果に寄与したのではないかと述べている。

花育は、ただ花を用いた活動をすればいいというわけではなく、作業療法と同じで、活動をリードし、サポートする者の援助観や介入方法、コミュニケーションが大きな意味を持つ。今後、花育講師と補助スタッフの、児童へのより良い関わり方を探索していきたいと考えている。

2. 小学生児童の自尊感情について

文部科学省は小学校の学習指導要領の中で「生きる力をはぐくむ」という基本理念を掲げており、「自分への自信を持たせる必要がある」としている¹¹⁾。自尊感情は、生きる力を育む重要な要素であるが、内閣府の調査によると、日本の若者は諸外国と比べて、自己を肯定的に捉えている者の割合が低いことが明らかになっている¹²⁾。

自己受容感情は学年が上がるに伴って低下する傾向があり、中学年以降の子どもの自尊感情は低下してくる¹³⁾と言われている。また、「全体的な自己価値観」と「自信」は、小学4年生から中学生にかけて徐々に低下していくという研究報告もある¹⁴⁾。

西田¹⁵⁾は、自尊感情の低さが、学校現場で問題となっているいじめ・不登校・問題行動・学びの意欲の低下などの原因になっているという指摘も多いという。自尊感情はまた、高すぎると人間関係においてトラブルを起こす原因にもなるため、自分を価値ある存在であると考えただけではなく、他者を尊重する心をもつことも重要であるとも述べている¹⁵⁾。花育活動では、仕上がったお互いの作品を鑑賞しあうことで、「自分の作品も良いけど、〇〇さんの作品も素敵」との気づきを生むことが可能である。そして、児童がお互いの作品の良いところを見つけて鑑賞しあうことは、他者から認められている感覚をもつことにも寄与すると思われる。また、花育スタッフや教員が「〇〇さんらしい作品ですね」と、クラスメートの前で声をかけたりすることで、より個々の児童らしさを場（クラス）で共有し、お互いを尊重し合える時間になるのではないかな。

家族の受容的な態度が子どもの自尊感情を育てる¹⁵⁾といわれている。今回のアンケートは、活動直前、直後に行ったが、作品を自宅に持ち帰り、家族とのコミュニケーションを取った後で調査を行うと、家族の反応によっては、より高まる場合もあると推察される。実際に、花育

後の保護者アンケートでは、わが子の作品の完成度を高く評価する保護者が多かった。花育活動の保護者への効果も今後検討していきたい。

3. 今後の課題

今回の結果より、1回の花育活動でも児童の自尊感情が高まることが明らかになった。

ただ、自尊感情は持続することが重要である。花育活動を継続することで安定した自尊感情を育める可能性があるため、今後はモデル校において継続的に花育活動を行い、縦断的な効果を探りたい。また、生け花、園芸など、他の花育活動にも児童に与える良い効果があると考えられる。活動種目による効果の違いについて考えることも今後の課題である。

まとめ

小学生児童132名に対し、フラワーアレンジメントを作成する花育活動を行い、実施直前と直後に、フェイススケールと自尊感情を問うアンケートを実施した。その結果、活動の前後の値には統計的な有意差がみられ、フラワーアレンジメントによる花育活動により、気持ちがよりポジティブになり、「自分のことをより好きになり、大切に思えるようになる」、すなわち「児童の自尊感情が高まる」ことが明らかになった。

謝辞：本研究に際してご協力を頂きました対象者の皆様に感謝申し上げます。また論文執筆にあたり、ご助言頂きました京都大学大学院医学研究科の松林潤先生に感謝申し上げます。

[文献]

- 1) 星敦子：「花育」活動の現状について 「花や緑に親しみ、育てる機会を通してやさしさや美しさを感じる気持ちを育む」花育活動，日農教誌，43 (2)：43-51，2012.
- 2) Hiroko Mochizuki-Kawai, Yuriko Yamakawa. et al : Structured floral arrangement programme for improving visuospatial working memory in schizophrenia, Neuropsychological Rehabilitation, 20 (4): 624-636, 2010.
- 3) 瀬山和子，大島峻・他：園芸療法におけるリラクゼーション効果の一研究 ―唾液中のコルチゾール値の測定と気分調査について―，北海道リハビリテーション学会雑誌，34：45-52，2006.
- 4) 武山直義，白井はる奈・他：フラワーアレンジメントの効用と作業プログラムへの活用について，第42回日本作業療法学会抄録集，P386，2008.
- 5) 白井はる奈，白井壯一・他：地域在住の中高年成人に対するフラワーアレンジメントの介入効果―心理面の変化と唾液中コルチゾール値に着目して―，佛教大学保健医療技術学部論集，第6号：11-21，2012.
- 6) 柴谷郁子：フラワー・アレンジメント活動による身体障害者療護施設入居者の生活の質（QOL）の向上について，人間・植物関係学会雑誌，5 (2)：31-37，2006.
- 7) 東京都教職員研修センター 子どもの自尊感情を把握する方法と指導のポイント (online)

www.kyoiku-kensyu.metro.tokyo.jp/09seika/reports/files/.../h22_mat01a_02.pdf
(accessed 2018-9-10).

- 8) 東京都教職員研修センター：自尊感情や自己肯定感に関する研究．東京都教職員研修センター紀要 (9), 3-26, 2010.
- 9) 山根寛：園芸と作業療法，作業療法，23 (4)：311-314, 2004.
- 10) 日本認知症コミュニケーション協議会編：認知症ライフパートナー検定試験2級検定公式テキスト．7章：アクティビティの種類と活用 4節：植物を用いた関わり：213-218，中央法規出版，東京，2016.
- 11) 文部科学省：中央教育審議会答申「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(online)
www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/pamphlet/_icsFiles/.../1234786_3.pdf
(accessed 2018-9-10).
- 12) 内閣府：今を生きる若者の意識～国際比較からみえてくるもの～平成26年版子ども・若者白書（概要版）(online)
<http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26gaiyou/tokushu.html> (accessed 2018-9-10).
- 13) 西田依子，林幸克：小学生の自尊感情に関する一考察－大垣市立南小学校の児童の実態から－，岐阜大学教育学部研究報告 人文科学 60 (1)：233-243, 2011.
- 14) 小島道生：小学生と中学生の自尊感情に関する研究，岐阜大学教育学部研究報告 人文科学 61 (2)：191-196, 2012.
- 15) 西田依子：自尊感情を育む学級経営のあり方－自尊感情が低下する中学年を中心に－，岐阜大学教育学部 教師教育研究 8：163-172, 2012.

（しらい はるな 作業療法学科）

（かじわら かおり 佛教大学非常勤講師）

2018年9月27日受理